

教育委員会会議録

令和3年(2021年)9月定例教育委員会会議

開 会 日	令和3年(2021年)9月28日(火)	
開 会 時 間	午後2時00分 ~ 5時00分	
開 会 場 所	議会棟 2階 予算決算委員会室	
出 席 者	委員 会	遠藤洋路 教育長 泉薫子 委員 出川聖尚子 委員 小屋松徹彦 委員 西山忠男 委員 苫野一徳 委員
	事務局	松島孝司 教育次長 森江一史 教育次長兼学校教育部長 中村順浩 教育総務部長 他
提 出 議 案	議第74号 職員の懲戒処分について	
報 告	<ul style="list-style-type: none"> (1) 市立高校及び専門学校との意見交換会について (2) 金峰山少年自然の家再建に伴う事業手法及び実施方針案について (3) 令和4年度市立高等学校使用教科用図書採択の一部訂正について (4) 令和3年度(2021年度)全国学力・学習状況調査の結果について 	
自 由 討 議	<ul style="list-style-type: none"> (1) 広聴事業の振り返り (2) 教員採用計画と質の保証について 	
署 名	出川 聖尚子	
	苫野 一徳	
会議録作成者	教育政策課 木村三恵	

〔開会の宣告〕

遠藤洋路 教育長

令和3年9月定例教育委員会会議を開会いたします。

〔会議の成立〕

遠藤洋路 教育長

本日は、私の他5人の委員が出席しておりますので、この会議は成立しております。

会議録署名人は、出川委員と苫野委員とします。

〔公開の審議〕

遠藤洋路 教育長

本日の会議の内容につきましては、会議日程のとおりですが、本日の議事のうち議第74号職員の懲戒処分については、会議規則第13条第1号「教育委員会に属する職員の任免その他の身分取扱に関する案件」の非公開事由に該当することから、非公開の審議が適当と思いますがいかがでしょうか。

議第74号につきまして、非公開に賛成の委員は、挙手をお願いします。

(全員挙手)

遠藤洋路 教育長

全員賛成により、議第74号は、非公開とします。

日程第1 前回会議録等承認

遠藤洋路 教育長

8月23日開催の令和3年第4回臨時教育委員会会議録、8月26日開催の令和3年8月定例教育委員会会議録、9月7日開催の令和3年第5回臨時教育委員会会議録を各委員のお手元に配布しております。この会議録等を承認することに、ご異議はありませんか。

(異議なしの声)

異議なしと認め、前回会議録等を承認することに決定します。

日程第2 事務局報告

〔1〕事業・行事等報告について

- 前回定例会議（R3.8.26）以降の事業・行事報告
- 今後の予定

日程第4 報告

- ・報告（1）市立高校及び専門学校との意見交換会について

《松永直樹 教育改革推進課長 報告》

西山忠男 委員

最初に訂正をお願いしたいと思いますけれども、必由館高校のオンライン会議のときには、開始が10分遅れたので、先進事例の紹介はなかったと思いますが、違いますか。

松永直樹 学校改革推進課長

動画につきましては、会議冒頭でも流しましたが、事前に皆さんに見ていただいておりますので、先進事例の紹介は動画配信は行わせていただいています。

西山忠男 委員

当日はなかったですね。

松永直樹 学校改革推進課長

当日、早めに来ていただいた方につきましては、動画は見られる方もいらっしゃったんですけれども、実際には生徒の皆さんは事前に見ていらっしゃいましたので、会議冒頭では見られなかったという方もいらっしゃいました。

西山忠男 委員

分かりました。それは結構ですが、感想を申し上げてもよろしいですか。

私、千原台高校には出席できなくて申し訳ございませんでしたが、必由館高校のオンライン会議で生徒さんたちと話をして、必由館高校は生徒さんの満足度が非常に高い学校だなということを感じました。そして、そういう意味では、市民のニーズにマッチした学校なのではないかという感じを受けました。

率直に言って、熊本高校や済々黌高校はちょっと無理かなという人たちが狙う、次の高校として、必由館というのは非常に良い位置にあるのではないかと。立地も良いし、普通科があつて、いろいろな進路選択ができるという意味では、人気が高い学校なんだろうなという印象を受けました。

そして、必由館高校の教育も成功しているんじゃないかなというふうに感じたんです。それは、生徒さんと何人か話をして、非常に明確に自分の意見を言うことができるし、私たちと対等に議論することができる。そういうことで、そんなに心配する

ことはないという、これから教育の質を向上させていく努力を継続していけば、大きな改革をしなくてもやっていけるんじゃないかなという印象を受けました。この辺は苦野委員がおられなかったのはちょっと残念だったんですけども。

1つ重要なことは、普通科は理系の進学ができるということなんですけれども、現在のグローバルリーダーコースというところでは文系しか行けないんじゃないかというふうに思われているというところが1つありますね。

それから、これは教職員の方だったと思いますけれども、保護者の方も自分の子どもにグローバルリーダーになってほしいと思っているわけではないと。地元就職して、親の面倒を見てもらいたいと思っている保護者の方が多いので、グローバルリーダーコースとしたときに、果たしてどれだけ人が集まるのかという疑問の声もありました。それはそうかもしれないという気もするわけです。

改革によってどういう高校の像を描くのか。例えば熊本高校レベルのエリート校にしようというのか、その辺のイメージが私自身まだはつきりしなかったものですから、ちょっと十分考える必要があるかなと思ったわけです。

確かにエリート校になれば、それはそれで素晴らしいことだけれども、ある意味、それによって行き場をなくしてしまう生徒さんが出てくると、市民のニーズにマッチしていないということになるかもしれないというふうに感じました。

すみません、長くなりました。

ありがとうございます。他にご意見ございますか。

皆さん、直接意見交換をされているから、それ以上はあまりないかもしれないと思いますが。

今、西山委員がおっしゃった点で言えば、いわゆる偏差値で上の学校に行けなかった人たちのための学校だということであれば、市立の高校として残す必要があるのかという基本的なところが多分ここはあるんじゃないかと思うんです。

そもそも子どもの数が減ってくるので、県立でいいんじゃないかという、それが基本的なスタートにあるので、他にいけない子どもが来るということであれば、それは県立でいいんじゃないかという、基本的な考え方なのかなと思いますけれども。

遠藤洋路 教育長

西山忠男 委員

熊本、済々黌レベルに行けないという、仮に次の選択として、

	<p>多くの人は私立の名門校を目指しますが、やはり学費が高い。</p> <p>県立の良いところも確かにあるけれどもちょっと遠い。第二高校とか遠いですよね。そういうことを考えて、総合的に勘案すると、必由館というのは良い位置にあると、もちろん都市的にも良い位置にあるし、レベル的にも良い位置にあるという印象を受けています。</p> <p>私は熊本出身じゃないので、ちょっと間違っただけを受けているかもしれませんが、生徒さんと話しているとそういう印象を、非常に自分たちは高校に来て満足しているんだということと言う生徒さんが多かったですね。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。議論のやはりスタートのところで市立高校が要るのかという、そこから多分始まっているのかもしれないですね。その点からもう1回議論し直す必要も出てくるのかもしれないですね。</p>
小屋松徹彦 委員	<p>私は総合ビジネス専門学校の生徒さんたちといろいろお話しさせていただきましたけれども、一言でいいますと、やはり2年経ったら卒業して、すぐに仕事に就くということが前提になっていますので、非常に実務に直結するようなカリキュラムというのが欲しいなというのが1つあったというのと、それから生徒さんの意見の中には、資格取得の意欲も非常に高く、もっと今よりもハイレベルな資格まで取れるような、そういうカリキュラムも欲しいなというような意見が出てきていました。非常に今の生徒さんたちの意欲の高さというんですか、それを感じました。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>ありがとうございます。あとはよろしいですか。</p>
菅野一徳 委員	<p>千原台高校の皆さんと本当に楽しい、良い対話ができたとあって、私自身はとても良い時間を過ごさせてもらって、むしろ学校をより良くしていきたいんだけど、我がことになっている生徒が少ないので、どうやったら巻き込んでいけるか考えたいというぐらいです。本当に頼もしいですね。</p> <p>生徒さんたちの声を聞いて、私はもう本当に若者の力を信じたいなど、信じられるなというふうに思ったんですが、やはり必由館高校に参加できなかったのは本当に残念なんですけれど</p>

も。

西山委員のお話を伺って、それからここに書かれてあることを読んで、ちょっと気になるのは、遠藤教育長グループの「入学した後に勉強しなければいけない雰囲気あまりない」とか、これはちょっと気になりはするんですけども、ただ、西山委員がおっしゃったように、満足度が非常に高く、今現在においては、それなりのプレゼンスを保っているということだと、グローバルリーダーコースがどうか中高一貫という話は、まだ完全決定事項じゃないと思うんですけども、元々の3つの柱、これはやはり大事にしたいと思うんですね。この3つの柱を大事にしながら、もう一度、先生や生徒たちとも話し合っていくというのが大事なのかなというふうに感じました。

というのも、先生方もすごく乗り気じゃない感といいますか、本当にそんなことしていいのという感じが、ここからすごく滲み出ている、現場の先生方がそういう疑問を持たれているのであれば、やはりうまくいくはずもないなという印象が、これを読む限り思いましたので。3つの柱は多分あまり反論ないと思うんですね。それが具体的に中高だとか、コース再編だとか、そういったかなり切実な不安を抱かれているというのは伝わるので、もう一遍、根本のところから一緒に考えて、特に先生方は、もちろん生徒もなんですけれども、一緒に考えてみたいなというのは思ったところです。

ただ、教育長がおっしゃったように、市立であるということの意味を、改めてちゃんと共有したうえで議論を積み重ねていかなければいけないと思います。限られた教育予算の中から、義務教育ではなくて、高等学校にかなりの予算を費やしていると。市民のニーズや市民の要望にしっかりそれは応えられているのか、そこは多分議論の出発点として、県立とは違って、市立で義務教育に割く。割こうと思ったら割けるお金を高等学校にも、大事にそこを割く、そのことの意味を。そこからもう一度、一番最初のところから議論すると早いというふうに、これを読む限りですが、今思っているところです。

遠藤洋路 教育長

先ほど出てきた、入学した後に勉強しないとイケない雰囲気はあまりないというのは、これは全体の流れの中でいうと、最初に必由館高校、今の学校の良いところ、さらに伸ばしていきたいところはどんなところかという話をして、ですから、今の学校はとても良い、そういう前提で。ただ、良いといっても完

西山忠男 委員

全無欠ではないでしょうから、何か今後もっとより良くしていけるところとか、今課題になっているところはないかと、そういう前提で話を聞いたときに、いくつかここに挙げたようなものが出てきたということなので。

基本的には良い学校だという、現状でいいと思っているという前提の話の中で、ただ、もう一切これ以上何も改善することはないんですかと聞いたら、そうじゃないということも出てきたので、これでみんながすごく困っているとか、そういう感じじゃないということです。敢えて言うならこういう項目ということですね。

今の話ですけれども、私のグループの生徒さんは、自分は大学進学を考えているので一生懸命勉強していますとおっしゃっていて、だから探究型の授業よりは、知識伝達型の方が効率が良いので、そうしてもらいたいというお話で、私は探究型の授業とはどういうものかという議論になって、ちょっと説得を試みたというようなどころがありますけれども、だから、生徒さんによっても違うんだろうし、コースによっても違うんだろうと思うんですけれども、意欲的な学生さんは結構いるような印象は受けました。

遠藤洋路 教育長

グループによって議論の進め方は大分違って、西山委員のBグループは、恐らく今の改革案についてどういう意見を持っているかというようなかたちですね。

私のところは改革案がどうかというよりは、今の必由館についてどう見るか、皆さんはどう思っているのか、何で必由館に入ろうと思ったのか、より良い学校にしていくにはどうしたらいいと思うか、そういうことで、今の案とは別に考えて聞いたと、そういうところですね。

Cグループ、出川委員のグループはどんな話をしたんですか。

出川聖尚子 委員

私のところは、必由館高校は今後どのようにしていけばいいのかということと、なにか発言を考えて出席していらっしやると思うので、改革案について話してくださいということを柱にしてお話しいただきました。いろいろご意見が出されましたが、大体、先ほど西山委員も言われたように、必由館高校に満足している話がほとんどでした。改革していくことに対しては、私が話を聞いた感じでは、前向きな感じで、より丁寧に生徒さ

	<p>んや教職員の意見を聞きながら考えていただけるといいという意見でした。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>そして、教職員の先生方は、ハードの面をどういうふうにしていくのかということが不明なので、具体的なことが浮かびませんと何人かおっしゃっていたので、どういうふうに進めていこうと考えているかを提示していくことも大切ではないかと聞きながら思いました。</p> <p>ありがとうございました。</p> <p>出川委員のCグループは、そうすると進め方としてはAとBを合わせたというか、その間みたいな、両方みたいな感じですね。</p> <p>必ずしも、何か改革に後ろ向きという、そういう感じではなかったと。</p>
出川聖尚子 委員	<p>そうですね。今出されている、例えば探究型の学習については賛成ですという先生のお話もありました。</p> <p>今の良いところを残してほしいと、生徒さんも教職員の方も、同窓会の、保護者でもある方も、おっしゃっていたので、どういう部分を残していくのかを十分お話ししたうえで、今後を考えていく必要があると思いました。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>今の良いところで、残していきたいところというのはAグループでも出てきているところもありましたので、普通科の中でも進学、普通の進学を目指す子どもと、芸術とかそういうコースがあって、いろいろな幅広い、生徒会もそうですね、それから部活をやりたいという人もいるし、勉強したいという人もいるしということで、それぞれでいろいろな子どもを受け入れてくれるというのが普通科の良さだと、そんなご意見が出てきたのかなというふうに思っています。</p>
西山忠男 委員	<p>もう1ついいですか。</p> <p>出川委員が言われたハード面の充実というのは、中高一貫に伴うハード面の充実という意味でしょうか。</p>
出川聖尚子 委員	<p>はい、その話が主だったと思います。例えば図書館が充実していなければいけないこと等、今思い出すとそうだったと思います。</p>

西山忠男 委員

中学校の開設のことについては、慎重になった方がいいんじゃないかという意見が多かったと思います。

しかし、全体を通しては、しっかり議論をすることができれば、もっと自分たちの意見を十分時間を取ったうえで考えてもらえる状況であればいいと言われていました。

中高一貫に関しては、我々のグループではかなり心配する声が挙がりまして、教員の方からは、まず安全面で心配であると。要するに中学1年生から高校3年生までが同じ学校の中でやっていくという意味で言われたんだと思うんですけども。それが1点と。

それから要するに部活を、中学の部活と高校の部活が同時に同じ学校内で行われるということで、多分安全面ということと言われたのだと思うんですけども。そういう問題もあるし、それからやはり人数を減らされるということにちょっと危惧を感じている。中学の人数にその分取られるようなかたちで高校の方は人数が減るわけなので、それによっていろいろな雰囲気さが下がるんじゃないかという、これは教職員だったと思いますけれども、懸念をおっしゃる方がおられましたね。

中高一貫にするんだったら、やはり附属中は別の場所に設置した方がいいんじゃないかという意見がありましたね。

それと、改革と同時に中学も募集して高校も募集するというのはちょっと問題があるんじゃないかと。高校の改革がうまくいって、ある程度軌道に乗った時点で中学を募集開始という、少しずらしたほうがうまくいくんじゃないかという意見もありました。

以上です。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございます。

狭くなるとか、人数が減るといった理由がよく分かるんですけども、中学校ができること自体に対して何か懸念というのは、率直に言ってあまりピンと来ないんですよね。何でなんですかね。

西山忠男 委員

中高一貫にそんなに魅力を感じていないという印象を受けましたね。中高一貫校にして、果たして本当に人が集まるんですかと言われて、私はちょっと大丈夫ですと言い切る自信がなくて、うーんと言ってしまったんですけども。

	<p>やはりその辺はまだ不安があるんだと思います。まだよく見えませんから、中高一貫の教育像というのが。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>人が集まるかどうかということと、先ほど西山委員がおっしゃった安全面というのは、これは既存の中高一貫校で何か安全面に課題があるという話はあまり聞いたことがないんですけれども、あるんですかね。</p>
西山忠男 委員	<p>私も詳しくは知りませんが、これは教員の方が最初におっしゃったので、そういうこともあるんだろうなと思って。要するに1つの運動場で6歳差がある人たちが一緒に体育活動をしていると、そういう問題は起こるかもしれないし、学校の中でのトラブルでもそういう心配があるのかもしれないなと思ったんですけれども、この辺は現場の先生がどういう印象を持たれるか、伺ったほうがいいのかもありませんけれども、どうでしょうか。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>この中で、中高一貫校で勤務したことがある人はあまりいないと思うから分からないですけど。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>今ご懸念の点につきましては、我々も本当にそういったことがあるのかということを確認していく中で、正直なところで申し上げますと、小中一貫校でもそうですし、中高一貫校でもそうですし、幅広の年齢層が交わる学校というのは、既に多数実在するという中で、あまりそこを心配するような状況はなかったです。</p> <p>元々、中学校と高校が、校舎が別になっていた学校でも、敢えて日常的に交わるように校舎を1つの校舎で学ぶようにした等の実践例もございますし、部活については、確かに安全面の配慮というのは必要だと思いますが、実際に県立の中高一貫校については、1つの部と一緒に練習をすることで成長が見られるとか、そういう成果も出ている。特に文化部あたりは当然一緒にやっていった方がより成果が出るというのはあるでしょうけれども、運動部でも取組は進んでいますし、そういった事例がたくさん出てきたところですので、そういった部分でご不安があるということであれば、他校の状況も併せてご説明をしていくということも必要なのかなと思ったところがございます。</p>

遠藤洋路 教育長

別に日本で初めて中高一貫校をつくるわけじゃないので、単に今まで経験したことがないから不安だとか、知らないから怖いということであれば、それは現にある学校でこうですよということは言えると思うし、今まである学校と全然違うことが起こるとも限らないので、その辺の懸念は解消できる範囲内ですよね。

人数が減るとか、単純に狭くなるとか、そういうところは確かに問題としてあるのかもしれませんが。

分かりました。

苦野一徳 委員

私もコースをどうするとか、中高一貫をどうする、校舎をどうする等に関しては、いわゆる方法、手法の次元の問題で、そこに関してはいくらでも対立が続きますよね。

やはり、工藤勇一さんの言葉なんかを借りると、最上位目標がどこかというのをまず合意をしないと、そのための方法なので。方法の話だけだと、にっちもさっちもいかなくなると思うんですよね。

その最上位目標を、私も改革検討委員会するときにもっと詰めてやっておいたら良かったなというような思いもあるんですけども、その最上位目標の合意というところを一旦目指さないと、やり方でいつまで経っても対立が続くかなという感じがありまして、やはり丁寧に進めていかないと、拙速にやりすぎて、こういう疑問とかがあまり噴出するのは良くないので、もう一度最上位目標と、それから何のための市立高等学校なのか、どうなれば、それは市立の高等学校として良いのか、みんなでどんな学校をつくっていきたいのか、そういった最上位のところをぜひ合意できるような場を設けたいので、方法は後で付いてくると思うんですね。

こういう目標があって、市立だからこそ、こういう学校が良いよねというのが合意できたら、今の現状はどうなのか。今の現状はこういった問題があるから、じゃ、こういった方法をみんなで作っていきませんかというふうに、多分丁寧に議論していけば、ある程度合意は取れるんじゃないかという気がするんです。

ここの、出川委員のところちょっと気になったのが、先生の「決定プロセスに問題があると思う、上から言われて改革をやるのではなく、下から積み上げて改革したほうがいい、慎重にやっていただきたい」という意見があって、私たちとしては

もちろんたくさんの方の声を聞いてきたというつもりは、以前からずっと言っていたとおり、あるんですけども、ただこういう懸念があるということもちゃんと受け止めて、何のためということが十分に共有されていないのかなという気もするんですよね。なのでそこをしっかりと一旦合意する、できるような場を、その方法も、もう方法ありきじゃなくて、ちゃんと目的に応じてどういう方法にするかということも一緒に考えるという、そういう姿勢というのでやってもいいのかなと、話を聞いて今思っているところです。

泉薫子 委員

どちらの会議にも出席できなくて残念だったんですけども、各学校の内容をずっと見ていきまして、確かに今、苫野委員がおっしゃるような、千原台とビジネス専門学校については、それぞれが自分たちの学校を良くしたいというか、どうしたいというような、そういったものに、ある程度の皆さんの理想が一致しているんですが、必由館のお話の内容だけが、やはりそれぞれが、自分たちが思い描いている必由館と少し違うというような意見が多いというふうに読んでいて感じました。

今現在、非常に満足していらっしゃいます。必由館の生徒も卒業生の皆さんもですね。地元で貢献したいという気持ちが強く、そこで教育を受けて地元で貢献できればいいなと思うような気持ちがあるというふうに見えます。また、非常に自由な校風でのびのびと学校生活を送っていらっしゃって、熊本の中で非常に人気の高い高校であるというのは間違いないんです。

ただ、やはりこれからいろいろ改革が必要だというのは分かっていると思うんですが、今、苫野委員がおっしゃったように、自分たちはどういう学校をつくるんだ、どういう子どもを育てるんだということを最初にやはりきちんと明示、出していかないと、今現在が満足しているだけに、なかなか納得してもらえないのかなというふうには、変化ということを希望されないだろうなというふうには感じています。

ですから、そこをやはりしっかりこちらの教育委員会で考えて、また現場の声も聞きながらですけども、確立して、説明していかないといけないのかなというふうに見えて思いました。感想です。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございます。

今のご意見もそうなんですが、先ほどの西山委員、苫野委員

のご意見もそうなんですけれども、必由館の中の人との話合いだけでは、多分先ほどの最上位目標というのは出てこないの、そもそも熊本市としてあるいは熊本市民が、市立高校を必要としているのかという、そこは、もし必要ならどういう学校なのかということ、今、必由館にいる人との話合いだけではなく、それは議会だったり、市民との意見交換だったりというところで、基本的な枠組みとしては諮るものかなと思うんですね。

だから、これまで我々が改革案というのをつくって、ここでも議論をしたし、もちろん学校とも議論はしていますけれども、議会なんかでも説明をしているという、その中の感覚でいうと、今のままの学校をずっと熊本市として維持していくということが本当にできるのかというか、いいのかというか、その議論が根本にあります。

それはもちろん中の人に聞いたら維持してくれということになるんだと思うんですけども、熊本市としてそれでいいのかというところの議論をもう1回しないといけなくなっているのかもしれないなど。

苫野一徳 委員

本当におっしゃるとおりだと思います。なので、そこがうまく学校との間でコミュニケーションができていないところもあったのかなという反省もあるのですよね。市民、あるいは議会も含め、あるいは様々なステークホルダーたちがどうしていきたいのかということと一緒に考えたいんだけど、そのプロセスをもうちょっと多分丁寧にしたほうがいいのかなど。

なので、勝手に動いているように見えるというのは、そういうことなのかもしれないので。ちゃんと必然性があるんだと。この答申にもあったような、どんな生徒たち、そのためにどういう柱、一応階層を持ってちゃんと目的があって、そのための柱があって、そのための方法論というものがあって、しっかりと考えてきたわけなんですけれども。そこのところ十分に伝わっていないのであれば、繰り返しコミュニケーションして、やっていくと。さらに修正されてもいいかもしれませんから、そのあたり、いろんな立場でその最終目標を確認し合っていきたいなどそういうふうに思いました。

遠藤洋路 教育長

分かりました。

そうすると、その必由館の中の人と外の人と両方の対話というか、そういうことも必要なんでしょう。私たちと必由館の中

の人たちだけが話し合っている、多分これ以上進まないということもあるかもしれない。

分かりました。じゃ、そういうところも含めて、今後、進め方は考えていきましょう。

本件については大体よろしいでしょうか。ありがとうございます。

では、本件と以上といたします。

・報告（2）金峰山少年自然の家再建に伴う事業手法及び実施方針案について

《田口清行 青少年教育課長 報告》

西山忠男 委員

これは11枚目ですか、PFI方式とDBO方式のメリット、デメリットがあつて、PFI方式を採用するという事で納得したんですけども、実は大学のある建物をPFI方式で改修しまして、その経験からしますと、PFI方式は非常に満足度が高いという印象を受けます。要するに、事業期間の15年、維持管理をやってもらうわけですけども、それをちゃんとやってもらったので、非常に良かったというのが実感です。DBO方式ですと、設計、建設と維持管理、運営が別々になってしまうので、そこにやはりちょっと不安がありますよね。建てた人と維持管理する人が違うとなると、いろいろなトラブルになり兼ねないので、私はやはりPFI方式がいいんじゃないかなという感じがします。

ただ、事業期間が終わった後は自前で維持管理をすることになりますので、そこはまたお金が要る話になりますけれども、それはどちらでも同じことですから、ということでPFI方式でよろしいんじゃないかと思っています。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございます。

他にはいかがですか。特にありませんか。

これは報告ですから、この後、どんな感じなんですか。

田口清行 青少年教育課長

ありがとうございます。

今後、方式につきましては、PFI方式、DBO方式等も比較しながら、より良いかたちでというふうに思っております。

	<p>先ほどのようなご意見、本当にありがとうございました。今後また、実施方針等についても、検討を進めさせていただきたいと思っております。</p> <p>特定事業の選定等につきましては、市の政策会議等に諮っていきたいと思っております。そのうえで、11月の教育委員会会議の折には、条例の改正等も必要になってまいりますので、そちらもご審議をいただきたいと思っております。</p> <p>また、12月の市議会の折に条例改正ということ、そして年明けに事業者の募集というふうな流れで進めさせていただければと思います。</p> <p>この金峰山少年自然の家の再建につきましては、また教育委員会会議の折にご説明を順次進めさせていただきたいと思っております。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>今の説明、11月の教育委員会会議で条例案をかけるというふうなことですか。</p>
田口清行 青少年教育課長	<p>一応その方向で。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>この実施方針案というのは、いつ決めるんですか。実施方針というぐらいだから。</p>
田口清行 青少年教育課長	<p>できましたら、併せてというふうになるかと思えます。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>実施方針も条例にも11月に一緒にということですか。</p>
田口清行 青少年教育課長	<p>はい。一応その方向で考えております。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。よろしいでしょうか。 では、他にご意見がなければ、本件は以上といたします。</p>
	<p>・報告（3）令和4年度市立高等学校使用教科用図書の採択の一部訂正について</p> <p>《石加浩二 指導課長 報告》</p>
遠藤洋路 教育長	<p>これは訂正ということですが、1点追加するという事です</p>

	よね。何か期限とかあるんですか。
石加浩二 指導課長	こちらのほうは、県に訂正を出させていただきたいと思っております。
遠藤洋路 教育長	今から訂正すれば、間に合うということですか。
石加浩二 指導課長	はい、大丈夫だと思います。
遠藤洋路 教育長	分かりました。 よろしいですか。
南弘一 千原台高等学校 校長	本校より、教科書採択案を提出する際に、十分な認識を欠いたまま提出してしまい、今回の一部訂正となりましたことをお詫び申し上げます。 以後、このようなことがありませんように努めてまいります。 申し訳ございませんでした。
西山忠男 委員	数学Ⅰのサポートブックということですが、数学Ⅱにはサポートブックはないんですか。
石加浩二 指導課長	これは第一学習社の数学Ⅰということで、数学Ⅰにこの場合はサポートブックがついております。既習内容をまとめてあるもので、その章について必要なものをまとめてあるということで、各章の始まりのときに一度見て、知識をきちんと持って、教科書に臨むというようなかたちになっているものでございます。
西山忠男 委員	分かりました。ありがとうございました。
遠藤洋路 教育長	他にありますか。 では、よろしいですか。 では、他になれば、本件は以上といたします。
・報告（4）令和3年度（2021年度）全国学力・学習状況調査の結果について	
《石加浩二 指導課長 報告》	

西山忠男 委員

4ページの中学校の数学のところなんですけれども、この学習指導要領の領域、4つの領域、数と式、図形、関数、資料の活用で、全て全国よりもマイナスになっていますね。これはちょっとショックなんですけれども、どうしてかというのも難しいでしょうけれども、何か対策とかは考えられるんでしょうか。

石加浩二 指導課長

ご覧のとおり、全国平均を確かに下回っているということになります。

R1との比較の部分を見ていただきますと、関数、資料の活用につきましては、令和元年度のときの全国との差と比べますと、上がってはいるということが分かります。ただ、数と式、図形のほうについては、下がっているということがございます。

各学校において、どの分野の改善が必要なのかということ、また各学校で分析していただいて、改善のほうをしていくことになると思います。

市教委としては、このような分析結果を校長会でお知らせして、また各教科のほうですね。数学の教科会あたりともお話をしながら、授業改善に向けていきたいなというふうに思っております。

西山忠男 委員

これだけはっきりした差がありますと、やはり数学の教師の集団の中で、少し検討していただいて、有効な対策を考えていただく必要があるのかなという気がいたしますけれども。

石加浩二 指導課長

分かりました。

遠藤洋路 教育長

他にいかがですか。特にありませんか。

苫野一徳 委員

それほど言うまでもないような気もするんですけども、西山委員のおっしゃるとおり、もちろん対策をすることは前提のうえで一喜一憂し過ぎずに、ということですよ。あまり、ここはちょっとまずいからポンポンお尻叩こうみたいなことはあまりやらないほうがいいかと思しますので、先生も生徒たちもびのびと学習と生活ができるような、そういう楽しい学校づくりということを一番にさせていただくのがいいんじゃないかなと。

よくいろいろな自治体が一喜一憂して、結構お尻たたきみた

泉薫子 委員

いなので、先生たちか悲鳴を上げているというのをよく聞きますので、熊本市はあまりそういうことがないようにというのが、余計な話ですが。

私も点数にこだわるのは、あまり良くないとは思いますが、以前のこういった共通テストのようなときには、中学生の点数は良かったような気がするんです、平均よりも。全国平均よりも高かったイメージがあります。

なので、心配するのは、熊本地震の影響などですね。ちょうど小学校高学年の頃に経験したのではないかと思われるんですが、その基本的な学習する時期に勉強が抜けて、熊本市の子どもたちが抜けている可能性などがないかというのをちょっと心配したんですけれども、いかがでしょうか。

石加浩二 指導課長

2ページを見ていただいて、平成30、31、令和3年とあります。熊本地震の後にこれは結果が出てきているというふうに思います。

地震の結果がここにドンと出てきているのかというところについては、はっきり違いますとか、そうですとか言えないんですけれども、基本的には全体的な平均が、グッと平均の方に、全国的に真ん中に集まっているという部分がありました。

ただ、おっしゃるとおり、以前は中学校の方が高くて、小学校の方が低いという結果がずっと続いていまして、小学校に算数の授業の支援員を配置したりして、グッと上がってきたという結果で、今、小学校の方が良くなって、中学校の方がちょっときつい状況が出てきているというふうには思っております。

ただ、先ほど見ていただきました質問紙の調査結果で、小学校よりも中学校の方が、実は市の令和元年度の差は大きくなって、プラスが大きくなって、授業改善は中学校がかなり大きく進んでいるなど。ただ、数値的にはまだ小学校のほうが良いというのはあるんですけれども、中学校の方の先生方も大分頑張っていたので、今後に期待していただければと思います。

泉薫子 委員

ありがとうございます。

先生方が非常に熱心にしていただいて、少しずつ上がっているのは見えているんですけれども、基礎学力といえますか、基本的なところの学習というのがきちんと子どもたちに定着して

遠藤洋路 教育長	<p>いるかどうかというのはもう一度確認していただけたらと思います。</p> <p>よろしく願いいたします。</p> <p>今の2ページにある中学3年生というのは、令和3年度の中学3年生は平成30年度の小学校6年生ということになるんですかね。同じ人たちですよ。</p> <p>だからその人たちが小学校のときはこう、中学校のときはこうだと、それが出ているんですね。</p> <p>それを比較するとどうなのでしょうね。あまり変わらない。</p>
石加浩二 指導課長	<p>平成30年もおっしゃるとおり、平成30年のときの子どもたちが令和3年で中学3年ということになります。</p> <p>国語は、見ていただきますと、国語A、基礎基本に関すること、Bが活用に関することですけれども、プラスとマイナスということで、若干プラスなのかなというような感じになるんです。ただ、これは問題数とかも違いますので単純に比較はできません。</p> <p>これが令和3年になりますと0.6%のマイナスと、ほぼ全国と同じで、あまり変わらないのかなと。</p> <p>もう1つの算数A、Bですけれども、これも両方とも全国を下回ってはいる。ただ、そこまではなかったんですけれども、今回は2.2ということで、1ぐらいですかね、ちょっと下がっているということになりますので、あまり変わってはいないんですけれども、やはり全国よりも上には行っていないというようなことは分かるかもしれません。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。じゃ、令和3年度の小学6年生が中学3年生になったら全国より上になるかもしれない。</p>
菅野一徳 委員	<p>気になったのは、この自己有用感の有無のところなんですけれども、5ページです。「自分には、よいところがあると思いますか」、全国との差は0だけれども、令和元年から随分減っているなという、何なんだろうというのと、「難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦していますか」も結構下がり方が大きいなと思ったんですけれども。この調査だけで要因なんていうのはとても分からないんですけれども、ちょっと気になるなと思ったんですけれども。何かコメントはあるでしょうか。</p>

遠藤洋路 教育長	何ページですか。
苫野一徳 委員	5ページです。
石加浩二 指導課長	<p>ご指摘の、特に3番あたりですね、失敗を恐れないでのところは、元年度に比べてマイナス、マイナスと。国を見ていただきますと、国もやはりマイナス8.1とマイナス4.4になっています。全国的にも何かこういう傾向があるのかなというふうに思います。</p> <p>ただ、熊本の子どもには、こういうことではなくて、失敗を恐れないで挑戦するような子どもたちに育ててほしいなど。そのためにも、授業あたりでどんどん発表したりとかいうようなこと、普段の生活の中でもいろいろなことに挑戦するようなことに取り組んでいただきたいというふうに思っております。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>これを見ると、熊本市で下がっているものは、全国でも結構下がっていて、熊本市で上がっているものは全国でも上がっていると、そんな傾向がありますね。全国的な傾向なんですかね。</p> <p>この辺も、もしそれぞれの学校で見えて、改善すべき点があれば、ぜひそこは探っていってください。</p> <p>他にはいかがですか。</p>
小屋松徹彦 委員	<p>この数字は全国との比較、出たり入ったり引っ込んだり、そんなに私は心配していないというか、思っているんですが、ただ1つ、ちょっと興味本位で聞かせていただくと、例えば全国とどこかの自治体の学校の比較で、例えば10ポイント以上よかったと、そういった例はあるんでしょうか。全国で見たときに。</p>
石加浩二 指導課長	<p>今のご質問ですけれども、本市の学校の中で全国よりも10ポイント高いとか、そういうことですか。</p>
小屋松徹彦 委員	<p>いや、そうではなくて、熊本は見たら分かりますけれども、全国的に見たときに、例えばある小中学校では全国と比べたら10ポイント以上高かったとか、そういった統計が出ているということをお聞きになったことがあるか。</p>

遠藤洋路 教育長	正答率のことですか。
小屋松徹彦 委員	そうです、正答率。
石加浩二 指導課長	本市の学校の中でも正答率が10%以上高いとかいうところはございます。ですから、全国的に見ますと、いくつもあるのではないかなというふうには考えております。 ただ、それがどれぐらいの学校があるかという統計はございません。
遠藤洋路 教育長	小屋松委員のご質問の趣旨としてはどの辺なんですか。
小屋松徹彦 委員	具体的に聞きますと、4ページの小学校、中学校の国語、算数とありますけれども、これでいくと、国語も1%か2%のプラスマイナスですよね。ここが10%以上高いと、そういったところはあるかという質問なんです。
石加浩二 指導課長	学校単位であればございます。
小屋松徹彦 委員	ありますか。
石加浩二 指導課長	はい。もちろん10%以上低いというところもございます。学校によっていろいろ。 例えば、小規模校なんかの場合には、その子どもの点がそのままストンと反映したりしますので、そういうこともあり得るんじゃないかなと思います。数が多くなればなるほど、当然平均に近いということもあります。 以上でございます。
小屋松徹彦 委員	そういったところも参考にする資料になるんじゃないかなと思いましたが、そうではなくて、生徒の多い少ないとか、そういったところでも変わってくるということなんですね。それは分かりました。
遠藤洋路 教育長	正答率が高い学校はどんなところが良いのかとか、そういうのは当然、市のほうでも分析をしているんじゃないかと思います。 全体ですからね、小学校92校、中学校42校のそれぞれ4

万人と2万人の平均にすると、全国平均とそんなに変わらないということなんでしょうけれども。学校ごとだと、確かに差はありますね。

ただ、やはり学校ごとの差もいろいろな要因があるんでしょうけれども、地域ごとの差もあったり、家庭環境とかの差もあったりするので、必ずしも学校の授業が良いから正答率が良いというわけでもない。いろいろな要素があるんでしょう。

ただ、これもそうですし、市の独自の学力調査もそうですけれども、例えば成績が伸びているところとか、そういうところも何が良いのかというのは、それはやはりよく勉強して、取り入れられるところは努力が必要になるでしょうね。

他にはいいですか。よろしいですか。

では、他になれば、本件は以上とします。

日程第5 自由討議

・自由討議（1）広聴事業の振り返り

《中元正人 教育政策課長 説明》

遠藤洋路 教育長

では、自由討議に入ります。

委員さん方は皆さん、泉委員以外の方はご自身で出られているので、大体ご自分のグループはどんな感じだったのかなというのは分かるかなと思いますが、泉委員、ご覧になって何かあれば。

私のところの感想でいうと、かなり皆さん、働き方改革については理解、学校の先生以外も非常に理解していただいているというふうに思いました。ですから、先生が楽をするのはけしからんとか、そういう人はあまりなくて、やはり今までかなり無理して仕事をして、例えばこれでいうと、私のグループだと5ページのところにもありますが、一番最後の学校評議員の方なんか、先生方は自分の当然得られるはずの時間を削って仕事をされているということですのでごくありがたいということ、それから一方で、保護者の方のそういう思いとか、働き方改革の趣旨とか現状とか、そういうものが伝わっていないんじゃないか。それから、その上の人ですが、これは学校の先生ですけど、仕事というか、授業、教育の質を高めるためにも、やはり時間が必要だということで、その辺の趣旨をいかに広く理解し

報交換をする場でもあります。それは子どもたちの情報であるとか、教材研究の延長もあると思いますが、それが机に座ったままで情報交換をするということが多いんですけども、それとは別に、職員室の一角に、やはり自由に座れるスペースをつくっているような学校もございます。そこで気軽にお茶を飲んだりするようなスペースをつくっているような学校も、増えているように思います。

ただ、学校で少し気を遣いますのは、職員室に子どもたちがいろいろ入ってきます。そういう中で、先生たちが、職員室でお菓子を食べているんじゃないかとか、お茶を飲んでゆっくりしているんじゃないかみたいに思われる場面もありますので、お菓子を置くスペースを工夫したりとか、そういうことをしている学校もあります。先生方が自由に情報交換をし、子どもたちのことについてまた情報交換をする場を設けるように各学校が工夫しているという状況がございます。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございます。

多分、苫野委員の理想の職員室は、ソファに座ってお茶を飲んだり、お菓子を食べたり、談笑したりという職員室かなと思うんですけども、子どもたちもそうすればいいじゃないかというか、そういうのが理想なんでしょうね。

苫野一徳 委員

今、それを言おうかなと思って、もうまきにお見通しという感じなんですけれども。ヨーロッパとかはスナックの時間があるんですよ。子どもたちがそういったお菓子とかを持ってきておいて、ちょっとリンゴをかじったりとか、スナックを食べたりとか、先生たちもそこでコーヒーを飲んでいたり、そういうのが当たり前という雰囲気ですよ。

先ほど泉委員がおっしゃったのは私のグループにいらした保護者の方だと思うんですけども、その方もヨーロッパの職員室なんかを例に出されて、とにかく学校をリラックスできる場にして、職員室とまた別のところにそういうルームをつくっているような学校も結構ヨーロッパなんかにはあって、もう本当に談笑する場所というのがちゃんと設けられていたりするんですよ。

だから子どもたちの場と職員室が区切られないというのがもしかしたら大事かもしれないけど、これはここで言う話か分からないですけども、各学校でそういう、もっと教室リフォーム

プロジェクトという実践とかがあるんですけども、子どもたちが自分たちの過ごしやすい、学びやすい場をつくるんですよ。

私は実はゼミの卒業生と、今、熊本市の教室リフォームプロジェクトをやっていたんですけども、量が敷かれたり、レンジが置かれて、すぐにみんなで円になって話ができたりとか、そういう子どもたちが自分で自分の学びの空間をつくるという。そうするとますます主体的に自分たちでつくった環境で、自分たちが学ぶんだ、そういうようなスイッチが入ったりするんですよ。

同じように、先生たちも職員室リフォームプロジェクトとかやったらいいかなと思って、そういうみんなにとって過ごしやすい場をみんなでつくるとい文化が、学校の中にインストールされていけば。働き方も一緒だと思うんですよ。自分たちが本当に働きやすい職場はどうなんだろうというのを話し合っ、これはやっぱり要らないよねとか、そういうしっかりとした文化がインストールされれば、働き方改革というのは各現場の知恵で、ちゃんと自分たちでできていくんじゃないかなというのは、そのときにもお話をされていて、すごく思ったんです。思いのある先生方がたくさんおられたので、ちゃんとみんなで交換する場があれば、進んでいくんじゃないかなというふうに感じているところです。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございます。

スペースの問題もあるでしょうけど。新設予定の天明の義務教育学校は最初からそういう感じにすればいいですね。

せっかくリラックスできるといっても、そんな子どもや保護者の目から隠れるようにしても、あまりリラックスできないですよ。

西山忠男 委員

今の議論はとても大事で、リラックスというのは、非常に重要だと思うんですよ。学校というのは、基本的に非常にストレスのたまる場所で、その証拠にアメリカでは、毎年発砲事件が学校で起こっていますし、死者も毎年出ています。いかに学校というところが、そういうストレスの溜まる場であるか。子どもたちにとって、そういう場所なんですよ、基本的に。

それを変えるには、やはり教員からやはりリラックスして、ストレスを溜めない、そして子どもたちにも温かく接すること

遠藤洋路 教育長

ができる、そういう雰囲気をつくるのが非常に大事だと思います。

分かりました。

少なくとも職員室でリラックスしていても、教育委員会からは怒られることはないということですね。熊本市においてはですね。

他にありますか。

西山忠男 委員

別の論点で。私のグループでは、小中学校の先生方は働き方改革、非常に満足度が高いというお話ばかりだったんですけども、市立高校の先生から、私のところの、14ページのところにありますけれども、この時間創造プログラムの内容はほとんど小中学校を前提にしたものであって、高校のことは考えられていないという非常に強いご不満の声を伺いました。

教育委員会には、現場の教職員の声や話を聞いてほしい。校長を通して話を聞くのでは駄目だ、なぜかという、校長は現場を知らない。すみません、南先生。

そういう強い意見がありまして、結局、この先生のご不満は、校長は義務制から来ていて高校出身ではないから、高校の実態が分かっていないということで、ちゃんと現場の意見を聞いてほしいというのがご意見でございました。

具体的には、例えば高校入試業務を教員の業務から外してほしいということも言われました。これはちょっと難しいんじゃないかなと、私個人的には思いますけれども、確かに大学で長年、入試業務に携わってきた経験からすると、入試業務が非常に重たい業務であるということも間違いないことなので、そういう意見があるということはよく理解できます。

ですから、高校については、別途考えなきゃいけないんじゃないかなと思いました。

今回の改革についても、改革のための仕事が上からどさっと降ってきて大変、振り回されているんですよということも言われました。これは千原台の先生でございましたけれども、そういう意見があったことをご紹介します。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございます。

このプログラムをつくるときには、校長以外も、教頭も教諭も事務職員も栄養教諭、それから養護教諭、それぞれの職の人

	<p>からプロジェクトチームに入ってもらって議論をしていますし、全教職員からのアンケートも取っているのので、話を聞く機会も設けてほしいということは、してはいますよね。</p> <p>だから現場の声を聞いてほしいというのは、限りなく「私の声を聞いてほしい」ということですね。</p>
西山忠男 委員	そうかもしれません。
遠藤洋路 教育長	<p>それに、あまり誰の話も聞かないでつくっているわけではないのは事実だと思うので。</p> <p>アンケートに書いたけれども取り入れてもらえなかったのかもしれないし、書いていないのかもしれないですけど、ここは少し、ここで言っていることを全部鵜呑みにする必要はないかなと思います。</p> <p>一方で、小中学校中心であることは確かですね。それは、高校は2校しかないから、それは教育委員会に考えてもらうんじゃないかと、自分たちでまず考えなければいけないんじゃないかというのが基本的なスタンスですね。</p> <p>それはそうかなという前提で話を聞くと、やはり校長の意見と教職員の意見が違うというのは、これはどの学校もあると思うので、できるだけ校長以外の意見も直接聞くという機会というのはつくっていく必要があるのかなと思います。</p> <p>アンケートは簡単に取れるようになりましたから、それはことあるときにそういうのを活用して、話を聞いていくのがいいのかなと思うんですね。</p> <p>南校長から何か意見はありますか。</p>
南弘一 千原台高等学校校長	<p>西山委員から質問についてお答えします。本校の職員が広聴会に出るということは、教頭を通じて聞きましたので、「どんどん自分の本音を言っておいで。」と言いましたので、多分本音を言ったんだと思います。</p> <p>私が義務制から高校に赴任しまして2年目です。高校と中学校、小学校の違いは確かにございます。ただ、同じところもたくさんあって、教育長からございましたように、やはり我々職場の主体は、それぞれ自分たちの職場をどうしていくかということをしっかり考えていくことが大事だというふうに思っております。</p> <p>一応毎日、オンラインのときには午前、午後、平常も午前も</p>

	<p>しくは午後、必ず1回は全部の授業を見て回って、職員の授業活動を把握しているつもりではありますが、やはり職員の側からいうと、分かってもらっていないと思われるということで、努力不足を痛感しているところです。</p> <p>あとは小中学校にはなくて高校にあるものが、先ほどありましたように高校入試業務、それから就職とか進学に向けての課外授業ですね、このあたりはあります。このあたりは、千原台高校の教員も指導しておりますが、県立の公立高校の校長会でも話題になっているところでありまして、課外授業については考えていかなければいけないというのは、高校の改革の1つになるものでございますので、こういった県立高校の情報もしっかり伝えながら、学校独自でも考えていきながら、市教委のほうとも相談しながら、改革を進めていきたいと考えております。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>ここに書いてある高校入試業務という、この負担というのはどうなんですか。何か、各学校でじゃなくて、教育委員会で改善できる場所というのはあるんでしょうか。</p> <p>あるから書いているんだと思うんですけど、どんなことが。いや、別に今言わなくても、あるならあるで言ってもらえれば、それはそれで、できるものはやっていくと思うんですけど。</p>
南弘一 千原台高等学校 校長	<p>私もまだ入試業務は昨年1年経験したのみで、経験が不足しておりますので、職員の意見をしっかり聞きながら、教育委員会にお願いして、できることがあれば、一緒に取り組みたいと思います。</p>
城野実 必由館高等学校 校長	<p>入試業務に関しては、とても負担感というよりも緊張感というものがすごく大きくてですね。やはり精神的な負担感が大きいもの、それと教室で監督していく業務が、昨年度、コロナ禍の中で、教室数がいっぱい増えて、教育委員会からも協力していただいたという状況になっています。職員数ではとても賄えない監督業務が入っています。</p> <p>ですから、今年もできれば、教育委員会のほうから入試のときに特別教室とか、そういうところに協力、人的な協力をしていただければ、とても助かります。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。</p> <p>確かに、去年もコロナで、そういうことでしたし、もち</p>

	<p>ろん今年も教室が多くなる、人が足りないということであれば、当然教育委員会からも応援をしますが、他にも何かあれば。</p> <p>高校入試業務を教員の業務から外してほしいということだから、単純に教員が一切やらなくていいようにして、全部教育委員会でやってくれという、そういう要望なのかもしれないですが。</p> <p>それを本当に望んでいるのかどうか、私は分からないですけども、どうなれば負担軽減ができるのか。各学校で考えてくださいというのは前提としてありますが、各学校で考えて、教育委員会がこうやってもらえたら助かるという提案があれば、それは適宜言ってもらえばいいと思います。よろしく願います。</p> <p>私いつも思うんですけど、「現場の声を聞いてほしい」という意見じゃなくて、その声の中身を言ってほしいんですね。どういう、何をしてほしいということがもしあれば、ぜひ聞かせてください。</p> <p>他にいかがですか。</p>
出川聖尚子 委員	<p>私のグループの中では、校長先生のリーダーシップが非常に大事という意見が出され、私は校長先生がまず働き方改革への理解が必要なんじゃないかと思いました。</p> <p>次に、働き方改革がうまくいっている例などの発言が出されると、そういうやり方があるんですねとお話をされている方もいらっしやったので、うまくいっている例の情報を様々な学校や先生方に届けることが必要と思いました。</p> <p>それと、子ども同士のトラブルなどが非常に時間を割くので、そこにはマンパワーが欲しいという話がありました。そのマンパワーとして学級支援員さんとか、教頭先生を2人にしてほしいとか、スクールカウンセラーとかスクールソーシャルワーカーなどを増やしてほしいという話が出てきたので、どういったらできるか分かりませんが、何か工夫ができればいいと感じたところでした。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>ありがとうございます。</p> <p>先ほどの件も含めて、学校改革推進課から何かありますか。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>後程西山委員が言及されたことについても述べさせていただきます。</p>

まず、先進事例の共有の部分ですけれども、私たちも非常にそこは大事だなと思っておりまして、この夏休みで、実績を出されていらっしゃる学校といたしますか、時間外を非常に減らされている学校があられましたので、そこにお尋ねをしまして、こういった実践例があるのかというのを確認しました。

具体的に申しますと、やはり中学校では部活動というのがかなりの比重を占めておりまして、部活動をいかに効率的にやるかということで、例えば通常2時間程度やっているものを90分でやるとか、日によって掃除の時間をなくす、また今後の取組としては月に1回程度は勤務時間内に終わるような部活の組立てをやりたい等、様々な取組を積極的に進めておられました。

そういったお話をお聞きする中で感じたのは、やはり校長先生のリーダーシップが非常に大事なんだなというのがありました。

校長先生が来られて、自分の体験談も交えて、長時間勤務で体調を崩されかかったようなことを含めて話されて、教職員の皆さんに働き方改革がいかに重要かというのを就任当初から、データも示しながらご説明をされていく中で、4月当初から職員の意識がいきなり変わったというようなお話でした。

現場の先生からもお話をお聞きしたんですけれども、校長先生はそんな言うけれども、できるかなみたいに思ったけれども、やってみたらすぐ変わった、変わったということをおっしゃられたので、こういった事例というのは、私たちも広く共有したいと思っています。

働き方改革のプロジェクト会議でそういった事例もご紹介するのと併せまして、ニュースレター等の発行で各学校には共有していきたいというふうに思っております。

また、プロジェクト会議ですけれども、年に数回行っておりますが、その中には高校の先生方にも入っていただいております。今回、先ほど西山委員からご紹介いただいたように、どうしてもやはり小中学校がメインの対策になりがちということもありましたので、そういった声も踏まえまして、幼稚園や高校、特別支援学校の先生方にも入っていただいて、違う校種間でこういった特別な課題があるのかという、そういった視点も大事にして協議を進めています。

具体的にヒアリングを進めていく中では、全体としては、課題は小中学校とほぼ変わらなかったというところがあります。ですので、小中学校で進めている取組を、高校でも進めていけ

ばおのずと時間外勤務時間が下がっていくというのは間違いな
いと思います。

一方で、先ほどありましたように、高校入試業務あたりは、
やはりこれは当然中学校も入試対策はございますけれども、高
校については精神的にも肉体的にも負担が大きいということが
ありますので、これから我々、高校改革を併せて今進めており
ますけれども、そういった中で入試のあり方を検討する際に、
少しでも先生方の負担が軽減される方策がないかというのは議
論していきたいというふうに思いますし、一部そのアイデアも
出てきているところでございます。

また、千原台高校におきましては、中学校の先生が校長先生
になっているというようなことでのお話があったとお聞きしま
したが、私がヒアリングしていく中では、逆に、例えば小学校
の先生が幼稚園の園長先生になる中で、全く違う視点が入るこ
とで働き方改革が進んだというような事例もたくさんございま
した。ですので、異校種間の交流というのは、いろいろご意見
はあるかもしれませんが、非常に、働き方改革について
も成果が出ているというふうに思っておりますので、そういつ
た事例も合わせて共有していきたいと考えております。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございます。他に。

小屋松徹彦 委員

まず、今回のこの学校以外に保護者とか地域の方々と一緒に
話ができたとするのは非常に良かったなと思います。

やはりこういう機会はどんどん増やしていったって、もう少し学
校の中を理解してもらおうとか、そういう機会をどんどんつ
くっていくべきじゃないかなというのは感じています。ただ今
回来ていただいた地域の方々、保護者の方々というのは、圧倒
的に、過去にPTAの会長をしましてとかということで非常に
学校のことをよくご存知の方が見えていたので、そういった面
ではちょっと非常に理解が進んでいる方が多かったなという印
象でした。

さすがに、もう少し「そうなんですか」というような、びつくり
するぐらいの感想を持つような地域の方が入ってくれたら、
もっと良かったのかなというふうに思いました。

内容的には、小学校以外というのは、特に日課の見直しとい
うか、そういうことが非常に進んでいて、結構早く帰れるよう
になりましたという感想が増えていたのと、それから通知表で

すか、あれが2回になったというのが非常に大きい、楽になったとおっしゃっていましたね。これは非常に良い、効果的だったんだなというふうに思っているんですが、一方で中学校の先生が、うちはまだ3回やっていますとか、1学期も通知表を出しましたということにこだわりを持っていらっしゃる先生もいます。それは入試対策的なことかなという意見でしたけれども、せっかく働き方改革で2回にして負担を減らそうというときに、うちはまだ1学期からやりますという、そのこだわりがちょっと違うんじゃないですかと。2回にしたところでの他の方法論は考えないんですかというところに、少し中学校の先生の意識改革もされたほうがいいんじゃないかなと感じた部分はありました。

それと、小学校では何が負担になっているかというところで行きますと、小学校の場合には学級担任制という、この担任制が、非常に負担感があるんじゃないかなというところが1つありました。それと、中学校においては部活ということなので、この2つをもう少ししっかり改革を進めていけば、もう少し働き方改革がよくなっていくんじゃないかなという感じはしました。

それと、もう1つ、これは教員、先生方の率直なご心境かなと感じた部分がありまして、これは11ページの真ん中にこういう意見があったんですが、子どものための頑張りどころはどこか、減らせる業務は何かといろいろ考えるんだけど、なかなかうまくいかない。生徒や保護者のために仕事をするのが目標であり、手を抜いてはいけません。どこを削減するのか、学校だけでは決められないと書いてありますが、やはり先生は本当に子どものためとか、ここでは保護者のためという意見も書いてありますが、そこが非常に強いゆえに、なかなか思うように内部からの改革というのが進まない一面もあるのかなというふうに感じました。

そこがさっきの校長先生のリーダーシップではないですが、やはりそこら辺に校長からのリーダーシップを発揮して、教員の意識を変えていくというか、そういった努力が本当に必要なんだなというふうに感じました。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございます。他にはよろしいですか。

当然、生徒や保護者のために仕事をする、仕事はそうだし、仕事では手を抜いちゃいけないわけですよ。それ以外の時間

をどうやってつくるかということが大事じゃないのかなと思っています。

よろしいですか。

では、自由討議の1件目は以上にします。

・自由討議（2）教員採用計画と質の保証について

《濱洲義昭 教職員課長 説明》

西山忠男 委員

ちょっと質問ですけれども、図表7の今後の採用見通しですが、新たな採用見通しCのところを見ますと、令和8年までは200ぐらいでいくんですけれども、令和9年になると65になります。こんなにガタンと採用数が減るんですか。

濱洲義昭 教職員課長

あくまでこの試算上ではこのようになりますので、集中的に臨時的任用職員の解消というのを前に持っていつている関係ではあります。これをどのようにまた調整するかということで、これから考えて参ります。

西山忠男 委員

230から65に激減します。これはもしこのとおりになれば、これは社会的には大問題だと思いますよ。これは大学教育に対する影響は非常に大きくなりますし、苦野委員、どう思われますか。

苦野一徳 委員

つまり倍率がかなり上がるということですよ。それも本当にこういうことになるのか、ちょっとあまり現実味がないので、どういう見込みか、もう少しご説明いただいてもよろしいですか。

濱洲義昭 教職員課長

どのような倍率になるかというのは、この志願者をどう確保していくかにもよりますので、まだここでははっきりしていません。

ただ、確かにご指摘のとおり、ガクンとR8から9にかけて減るようなかたちになりますので、なだらかな採用計画の検討も続けたいと思います。

遠藤洋路 教育長

これはつまり今後5年間で臨時採用を0にする、その分をもうとにかく正職員を5年間で採るんだと。で、採りきっちゃったら後は、流れに任せて退職する人の分だけ採用すればいいという、そういうふうにすると、こうなるということですよね。だからとにかく臨時採用を解消するというのを優先したら、こうですよということなので、このとおりにするかどうかというのは、別の問題です。

今の採用計画だと、Aの方はもうちょっとなだらかに。それでも200人台から100人、これは退職者が減るから、そういうことなのかもしれません。

ということなので、それは決め方次第というか、何を優先するかということなんでしょう。

常識的に考えれば、ある年が230人で、次の年が60人ということは、あまりしないんだと思います。ただ、臨時採用を解消したい、するということ、それは1つ課題ではあります。5年後に0まで持っていかどうかは別として、そういうある程度、採用を急ぐという必要もあるかもしれないですね。

ちょうど、この退職制度変更で定年が延長、これに伴って定年が延長される年は誰も退職しないということになって、普通にいくと、今後、退職者が2年に一遍になって、半分ずつになる、採用数も半分になるというのが基本ではあります。

その辺の影響がいろいろあると、試算としてはこんなふうになるということですね。

これを見ると、やはりもうちょっとなだらかに採用しても、そのうち臨時採用は0になるということなんでしょうね。平準化しても、退職が減るから。ということでもいいですか、大まかにいって。

濱洲義昭 教職員課長

おっしゃるとおりです。

遠藤洋路 教育長

だから、どこまで急いで臨採を解消するかという話ですね。この定年延長は全国的な制度変更で、これはいつからいつまでなんですか、要するにR5から何年までですか。

濱洲義昭 教職員課長

1ページの図表3、一番下のところを見ていただきますと、R5年度から段階的に2年に1歳ずつ引き上げられて、完成形がR13ですね。

遠藤洋路 教育長

つまり、2年ごとに5歳上がるから、10年間ですね。令和5年度以降の10年間は、もう退職者は半数になるということだから、全国的に教員の採用が半分になると、大まかにいうとそういうことだということですね。

それに合わせて35人学級化が進んで、少し緩和されてきますので、教育学部にとっては今非常に倍率が低い状態が続いていますけど、令和5年度以降は、一気に採用が減る可能性がある。そんな中で、我々熊本市は、そんなに急に上げたり下げたりする必要があるのかといえば、そこは考えるべきで、大まかに、他の都市があまり採用しない年に採用したほうが得ですよ。他の都市が大量に採用するとき、うちも大量に採用しようとしたら、それはなかなか難しい。うまくその辺をどうやってコントロールしていくかなということですよ。

西山忠男 委員

減少するのは仕方がないと思いますけれども、できるだけなだらかなかたちで減少するような計画にしていきたいと思いますね。

230から65に極端に下がるような事態が起こると、教育職に未来はないと思って、優秀な学生さんが教育学部に行かなくなる可能性があって、将来的に質の高い教員を確保することが難しくなるんじゃないかという気がするんです。それはやはり採用する側も配慮が必要じゃないかなという気がいたします。

遠藤洋路 教育長

教員の採用数というのは、今までも何倍も変動してきているので、少ない年は多分このぐらいだったんですよ。今の3分の1ぐらいだったんだと思います、全国的に。

それで今、すごく増えてきて、これでいうと最初にありましたよね、採用者数は全国で35,000人台ですよ。これが確か一番少なかったときは11,000人とか、そのぐらいだったんですよ。だから、今の3分の1ぐらいの採用しかなかったんです。なので、採用の倍率が10倍だったり、15倍だったりしたんですけども、そういうあまりにも世代によって倍率が極端に違う状況はやはりあまり良くないでしょうね。

ただ、このさっきの5ページ、この表を見ると、今の計画とは逆に、正規職員の増加に向けた臨時的任用の解消というのを、もうちょっと遅い時期に、令和7年度以降に持ってくると、もっと平準化できるんですよ。数年間我慢して。その数年間で

	<p>臨時採用の人が見つかるかどうかというところが一番問題なのかもしれない。</p> <p>敢えて今は大量に採用しないで、後で採用するとかそういう方向も、これを見るとあるのかもしれないですね。その方が全国的な教員の採用の数とかを考えても、優秀な人が採れる可能性があるかもしれない。これを見ると、そんなふうに思えますね。</p>
泉薫子 委員	<p>採用試験の改善の項目の1番で、新卒者を確保する仕組みなんですけれども、4ページです。この福岡市の例が出してあるんですが、これは非常に画期的というか、推薦枠をつくるということだと思うんですが、これはまだ今から、2022年度採用から計画されているということなんでしょうか。これ以外で、どこかこういう取組をやっている地域があったり、その成果というか、評価というのが分かっているというのは、何かないんでしょうか。</p>
濱洲義昭 教職員課長	<p>福岡市の取組は、このときですけれども、2022年度採用試験ですので、もう今から準備を始めておられると思います。必要に応じて、向こうに聞きたいと思います。</p> <p>あとは他団体の状況ですけれども、すみません、ちょっとこのようかなり珍しいといいますか、私どもが確認する限りはありません。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>2022年度採用試験というのは、2022年4月に採用される人ということじゃなくて、2022年度に実施する採用試験という意味ですか。</p>
濱洲義昭 教職員課長	<p>我々が見た資料では22年度実施の採用試験ということになります。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。来年やる試験ですね。 どうなんですかね。</p>
泉薫子 委員	<p>これは面白いというか。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>何かリスキーというか。</p>

泉薫子 委員	それです。どのぐらいのリスクが、どういうリスクが。 お願いします。
苫野一徳 委員	個人的には、大学がもし推薦するとなると、かなり責任を持つと思うんですね。変な人は、変な人というのは変ですけども、やっぱり自信を持って、優秀な先生になる学生を送りたいと思うので、そうすることで、今後も大学の信用がちゃんと確保できるようにと、そういう思いはかなり高まると思うので、私自身は、やりたいなと思ったりはしますけれどもね。
遠藤洋路 教育長	採用枠の2～3割ということは、今新卒の人が入っているのが多分、採用枠の2～3割ですよ。3割ぐらい。
苫野一徳 委員	そうですね。
遠藤洋路 教育長	そうすると、全員、新卒は試験しないで推薦ということにもなる。
苫野一徳 委員	それはちょっと強引かなと思いましたね。何人か枠を設けていただいたりすると、本当に責任を持って推薦したい学生を推薦したいなと思います。
遠藤洋路 教育長	確かに試験を受けて入っても、試験なしで入っても同じ人なので、もしかしたら同じ人たちが入って、全然変わりませんでしたということになるかもしれないですよ。
泉薫子 委員	やはり試験免除といえますか、採用試験受けなくていいというのは大変大きな魅力かなと思うんですね、学生にとっては。ですので、教師を目指そうというときに、1つのそういうルートがあるというのはいいのかなと思いますけれども。
遠藤洋路 教育長	世間の評判からすると、遂に教員は試験もしなくて、誰でもなれるようになったんだみたいな、世も末だみたいな意見もあったのは確かです。だからそう見られる面もある。ちゃんとしないと。 でも、ちゃんと推薦して、大学で選ぶからというふうに教育学部の先生が言うんでしたら、それは安心して、私たちもしてもいいかもしれないですけど。

泉薫子 委員	大学が高校からの推薦枠というのを取りますよね。その生徒たちの評価というか、そういったものはどんなふうでしょうか。
西山忠男 委員	これは議事録には残さないでもらいたいということはできますか。
遠藤洋路 教育長	いや、YouTubeに。
西山忠男 委員	ちょっと申し上げにくいですね。
出川聖尚子 委員	<p>大学で指定校推薦で入ってこられる学生さんはある程度の成績が科目の基準があり入ってこられます。</p> <p>私の感覚ですけれども、学校の勉強をしっかりやっていらっしゃる方は真面目です。高校に学力が違っていますので全てとは言えないところもありますが、指定校できた学生さんは日頃から課題にもコツコツとまじめに取り組むので力が付いていきます。私としては評価できると思っています。</p> <p>ただ、福岡市のように面接を全くしないとほしくて、そういう推薦枠はあるのはいいと思いました。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>確かに考えてみれば、推薦でも面接ぐらいはしたほうが良いような気がしますよね。面接までなくした理由は何かあるのか、よく分かりませんが。</p> <p>他にはいかがですか。</p>
苫野一徳 委員	<p>少し長い目の話で、私もまだ考えがまとまっていないので、この採用計画とどう使われていけるかというのが分からないところもあるんですが、教員養成や研修に関わる中で、少しずつ私の中で強くなってきた思いがあって、今まで、やはり教師の力量を上げるというときは、日本は特に一人の先生の能力にいろいろなものを頼りすぎるシステムだと思うんですよね。いろいろなものを一人の先生の肩にという感じで、教員養成も研修も、先生一人の力量を上げるというところにフォーカスしすぎてきたなという思いがすごくあるんですよね。</p> <p>でも本当の先生は、チームプレーだと思うんですよ。なんですけれども、教員養成の段階で、チームビルディングとか学ぶ機会とかほとんどないですし、研修でもほとんどないです。</p>

本当に教師の力を最大限発揮するためには、チームでいかにパフォーマンスという言葉を使っていいのかわからないですが、チームでいかにパフォーマンスを最大化していくかということ、そこはかなり大事なポイントがあるような気がしていて、そうすると、そこにフォーカスをした養成はもちろんのことながら、研修とか採用とかも全部、そこを核にしながらできないかなど。

何かこの考えで、ちょっとアイデアが出ることができないかなということ、このところ、ずっと考えていて。当然掛け算ですよ、いろいろな先生の能力が掛け算。そのベストマッチでどうなるのか。

管理職は管理職でそれを最大限発揮させるための管理職はどういうあり方なのかといったことをベースに考えていくと、じゃ、採用のあり方は、どうあればチームとして熊本市の学校を最大化できる、教員の採用の仕方ができるんだろうかと。

すみません、全然具体的じゃないんですけども、何かこういう発想から養成、採用、研修の流れを何か考えてみたいなという思いがありまして、ちょっと本当にまだアイデアベースなので、すごく思いつき段階なんですけれども、ちょっとご提案だけさせていただこうと思いました。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございます。確かに採用段階では個人個人の採用しかしませんね。チームプレーということで採用、選考はしていませんね。

何かまた具体的なアイデアが今後あれば、提供してください。

教員養成という意味では、これは何かいろいろなところで、今の教育学部ではこういうことはやっていないから、こういうことをやってほしいみたいな話をいくつも聞きすぎて、忘れちゃうぐらいあるようなんですけれども、どうなのでしょうね。何か足りていないこととか、もっとこういう教員養成段階でこういうことをしておいたほうがいいと、苫野委員自身が思われるようなことというのは、今のチームビルディング以外に何かありますか。

苫野一徳 委員

挙げれば切りはないと言えるかもしれないんですけども、それこそ探究ということにフォーカスしていくにおいて、やはり先生自身もそうですし、学生自身も、自分が探究したという経験がほとんどないので、子どもたちの探究しやすさとか、探

究がどの学びをつくるということが経験的にないんですよ。

日本の学校教育の場合は、板書するとか、指導案を作成して、先生が言わばハンドリングしながら、45分や50分授業をつくっていくということに関しては、もう膨大な蓄積とノウハウと知恵が溜まっていて、その脈々とした伝統があって、この伝統芸に関しては、本当に世界に冠たるものだと思うんですけども。真逆の、真逆というか、子ども主体の学習者中心、主体の探究を中心とした学びをいかにつくっていくかということに関しては、ほとんどノウハウの蓄積がないんですよ。

そうすると、探究を学生が、先生がしていけるようになるためには、先生や学生たちがその経験をしなきゃいけないので、例えば研修にしても、研修自体をプロジェクトにしていくとか、管理職研修にしても、教員研修にしても、何かプロジェクトベースで、チームを組んで、何か探究して、自分たちの学校でそれが実践しておいて、持ち寄ってまたそれを交換して、そのプロジェクトベースでやっていく。コンテンツベースよりもプロジェクトベースでやっていくのが、こういうことがちょっと機能し始めると、これに見合った採用のあり方というとなんかかなということが考えていけるようになるかなと思っています。10年ぐらいかかる話だと思うんですけども、探究にフィットした支援ができるような教員養成というのは圧倒的に足りていない。圧倒的ですよ。

遠藤洋路 教育長

分かりました。ありがとうございます。

今日の資料でさっきの5ページですか、表を見ると、数に関しては、今後の採用について、この表を見ながら大体どんな配分にすればいいのかということで、非常に見通しが立ちやすくなったと思うんですよ。だからそういう意味でこの表は非常に良かったなと思います。

4ページに書いてあることも、数の確保という意味では、そうなんだろうと思うので、あとは今、苫野委員がおっしゃった質の確保ですよ。これは正職員にしていくということも1つ質の確保に入れていますけれども、それ以外にも、養成の段階でどういう教員の質を上げていくのか。採用の段階ですよ。これは今後、考えていく必要があるのかなと。

教員に限らず、一般的に言えば、給料を上げれば質の高い人は来るんです。スキル、質の高い人には良い給料を払わないと来ないんです。文部科学省にもぜひ、教員の給料を上げるとい

西山忠男 委員

うことをしてほしいと思うんですけれども、それ以外の方法で我々が頑張れることは何かということですね。そこはちょっとこれからも努力していく必要があるのかなと。

教育長のおっしゃるとおりで、私も同じ感想を持ったんですけれども、この案は量の確保に主眼があるんですよね。何とか数を揃えましょうという案になっていて、質の良い教員を採りましょうというふうには見えないですね。そこが一番問題で、やはり質の良い教員を確保するには、受験者を増やす努力が必要なんですね。

そういう意味では、試験会場の拡充というのは、量の確保という意味だけでなく、質の確保の意味でも有効な手立てかもしれないんですけれども、これが可能かどうかというのは、ちょっと問題かなとは思ってますよね。面接をするとすると、なかなか大変な仕事になるなという気がいたしますので。でも、やはり熊本市の魅力を訴えて、熊本市の教育がこういう素晴らしい、ICTも進んでいるしということで、全国から受験者を集めるようなそういう努力をしていかないと、質は上がらないという気がしますよね。

もちろん給料を上げれば別ですけれども、それはちょっと無理なので、そういう努力ですよ。そこで知恵を絞らないといけないんじゃないかなと思います。

小屋松徹彦 委員

私も今の試験会場の拡充、量の確保、そういう意味ではこれはぜひやっていかなきゃいかんかなと思います。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございます。

これはやっている自治体はあるんですよね。首都圏とか関西に出掛けて行って採用しているところは。それは誰が面接しているんですか。

濱洲義昭 教職員課長

他の団体でやっているところがあるのは認知していますけれども、誰がやっているかは分かりません。

あと、市の人事委員会がやっている試験がありまして、それは東京でやっているんですよね。事務を行うのは、例えば東京事務所の職員がやったりしていますけれども、そういう応援体制があるところを活用するという手はあるかと思います。

遠藤洋路 教育長

どのぐらいの人数が来るか分かりませんが、今、熊本市でやっている試験と面接を首都圏とか関西でやると考えたら、結構な人数が行かないといけませんよね。確かに実際やるとなったら、誰がどうやっていくというのは課題になりますね。分かりました。

西山忠男 委員

似たような悩みは大学も持っていて、今、大学の受験者をいかに増やすかということで、国立大学は合同入試説明会というのをやっているんですよね。ある年は鹿児島で、九州の国立大学を全部代表者が集まって、そこで入試説明会するというようなことをやっていますので、試験は熊本でやるけれども、熊本市の教育についてというふうな説明会を首都圏ですというのは、わりと可能じゃないかなと。それも他の九州の都市と連携して、九州の土地で教育に従事しましょうというような説明会にしたら、人は案外集まるかもしれないという気はします。

遠藤洋路 教育長

分かりました。ありがとうございました。

実際、やっているところがあるということは、やり方があるということなんでしょうから、ちょっと調べてみてください。

苫野一徳 委員

ちょっと知りたいんですけども、大学で熊本を出て、先生になって戻ってくるという人は、どれぐらいいるかというのはご存じですか。

濱洲義昭 教職員課長

統計を持っておりませんので、ちょっと調べてみます。

遠藤洋路 教育長

今のは、大学で熊本を出てというのは、熊本県外の大学に進学して、教員として県内に戻ってくるんですかね。

毎年面接していますから、感覚的には結構いますよね。

大体県外から受ける人は、熊本出身という方が多いです。生まれ育った熊本市で何とかしたいと志望動機に書いてありますから。

よろしいでしょうか。

では、他にご意見がなければ、本件は以上にします。

[非公開の審議]

日程第3 議事

・議第74号 職員の懲戒処分について

《濱洲義昭 教職員課長 提出理由説明》

〔採決〕 【原案どおり承認された】

〔閉会〕

遠藤洋路 教育長

本日の日程は全て終了したので、令和3年9月の定例教育委員会会議を閉会いたします。お疲れさまでした。